

不在因果について

伊佐敷 隆弘

On Absence Causation

Takahiro ISASHIKI

要 旨

「不在因果」とは、不作為（実行されなかった行為）や否定的出来事（生じなかった出来事）を、原因（或いは結果）とする因果関係のことである。

まず、因果関係一般に関して、「出来事個体間の因果関係は出来事類型間の関連性を暗黙の前提とする」、「結果は原因だけでなく背景条件（産出条件の現存と妨害条件の不在）にも反事実的に依存する」、「原因と背景条件の区別は文脈依存的・人間依存的である」という特徴を明らかにする。これらの特徴を踏まえ、妨害条件の不在が「原因」として際立つと「不在因果」となることを明らかにする。

その上で、「不在因果は真正の因果関係ではない」という批判に対して答える。まず、「不在因果は因果的説明の一種にすぎず、因果関係そのものではない」という批判に対して「或る出来事が『何』であるかということの内に既に他の出来事類型との関連性が含まれており、因果関係と因果的説明は相互依存的である」と答え、次に、「不在因果を認めると、直観に反するくらい、原因が多くなる」という批判に対して「原因・背景条件・それ以外の出来事の区別がある以上、不在因果を認めても、原因はそうやたらに多くはならない。しかし、膨大な背景条件の広がりがあることはむしろ自然なことである」と答える。最後に、「非存在は因果的な力を持たないから原因になりえない」という批判に対し「因果関係一般に既に『妨害条件の不在』という非存在が含まれている。そもそも因果関係とは世界と人間とが共同して作り出した秩序（出来事類型間の関連）であり、不在因果もそのような秩序のひとつである」と答える。

はじめに

この論文のねらいは、「不在因果に関する検討を通して、因果関係とは何であるのかについて考える」ということである。

まず、不在因果の定義と実例を示し、「不在因果は真正の因果関係ではない」という批判を紹介する。(第1節)。本論文は、この批判に対して不在因果を弁護する。そのために、まず、不在因果に限定せず、因果関係全般の特徴について考察する。(第2節)。そして、この考察を踏まえ、不在因果批判に答え、「不在因果とは何であるのか」、「因果関係とは何であるのか」を明らかにする。(第3節)。

1. 不在因果は真正の因果関係か

(1) 不在因果の定義と実例

「不在因果 (absence causation, negative causation)」とは、実行されなかった行為 (即ち「不作為 (omission)」) や生じなかった出来事 (即ち「否定的出来事 (negative event)」) を、原因 (cause) 或いは結果 (effect) とする因果関係のことである。例えば、次の①②は不在因果を述べている文である。①は不作為を、②は否定的出来事を、原因としている。

太郎があの花に水をやらなかったことが、その花が枯れた原因だ。……………①

この夏この地域に雨が降らなかったことが、その花が枯れた原因だ。……………②

①②における結果は、「その花が枯れたこと」という実際に生じた出来事 (即ち「肯定的出来事 (positive event)」) であるが、この結果をもたらした原因は、①では「太郎があの花に水をやらなかったこと」という太郎の不作為であり、②では「この夏この地域に雨が降らなかったこと」という否定的出来事である。「太郎によるあの花への水やり」も「この夏のこの地域への雨降り」も実際には起こっていない。このように実際には起こらなかったことを原因とする因果関係が不在因果である。なお、①の文が述べられるのは、その花が一人住まいの太郎の部屋のベランダにある場合のように、太郎の水やりが当然期待されるような場合である¹⁾。

また、不在因果には (原因ではなく) 結果が不作為や否定的出来事であるようなパターンの不在因果もある。例えば、次の③④である。

ひどい風邪をひいたことが、彼が試験を受けなかった原因だ。……………③

大量の虫が発生したことが、その木に果実が実らなかった原因だ。……………④

③の結果は「彼が試験を受けなかったこと」という不作為であり、④の結果は「その木に果実が実らなかったこと」という否定的出来事である²⁾。しかし、③④のようなケースについての検討は別の機会に譲り、本論文では①②のようなケース、即ち、原因が不作為や否定的出来事である不在因果だけを取り上げる。

(2) 不在因果への批判：因果的力の欠如・原因の増加

不在因果が真正の因果関係であるか否かについては論者間で議論がある。例えば、ルイス ([Lewis 2004]), マグラー ([McGrath 2005]), メラー ([Mellor 1995], [Mellor 2004]), メンズィーズ ([Menzies 2004]), シェイファー ([Schaffer 2004]) たちは「不在因果は真正の因果関係である」と主張するが、アームストロング ([Armstrong 2004]), ビービー ([Beebe 2004]), ダウ ([Dowe 2000], [Dowe 2001]) たちは「不在因果は真正の因果関係ではない」と主張する³⁾。

不在因果が真正の因果関係ではないとする批判は主に次の2点を根拠としている。

非存在は因果的な力を持たないから原因になりえない。……………⑤

不在因果を認めると、直観に反するくらい、原因が多くなる。……………⑥

⑤は次のような批判である。①の「太郎のあの花への水やり」も②の「この夏のこの地域への雨降り」も実際には起こらなかった。それらの行為や出来事は存在しなかった。存在しないものが因果的な力（即ち、結果を産出する力）を持つことは不可能であり、原因にはなりえない⁹⁾。その花が枯れた真の原因は肯定的出来事、即ち、実際に生じたことの内に求められねばならない。例えば、「過度の日照」や「その花からの水分の蒸発」などの肯定的出来事が、あの花が枯れた真の原因である。存在するものは因果的な力を持ち得るが、存在しないものは因果的な力を持ち得ない。それゆえ、原因になりえない。したがって、不在因果は真正の因果関係ではない。⑤はこのような批判である。

これに対して、「不在因果は真正の因果関係だ」と主張する者は、「しかし、たとえ過度の日照や水分の蒸発があったとしても、もし太郎があの花に水をやっていたら、その花は枯れなかつただろう。とすれば、あの花が枯れた原因はやはり太郎が水をやらなかったことだ」と反論するかもしれない。この反論に対するさらなる批判が⑥である。即ち、次のような批判である⁹⁾。

「たとえ過度の日照や水分の蒸発があったとしても、もし太郎があの花に水をやっていたら、その花は枯れなかつただろう」と言うことができるなら、同様に、「たとえ過度の日照や水分の蒸発があったとしても、もしエリザベス女王があの花に水をやっていたら、その花は枯れなかつただろう」と言うこともできるはずだが、それは不自然な言い方である⁹⁾。言い直せば、「太郎の水やり」と「あの花が枯れたこと」の間に、「もし太郎があの花に水をやっていたら、その花は枯れなかつただろう」という反事実的依存関係（counterfactual dependence）が成り立つのなら、同様に、「エリザベス女王の水やり」と「あの花が枯れたこと」の間にも反事実的依存関係が成り立つはずである。そして、同じことは他のすべての人にも当てはまる。世界中の誰であれその人があの花に水をやっていたらあの花は枯れなかつたはずだ。つまり、世界中の任意の人の不作為があの花が枯れた原因になるだろう。それだけではない。過度の日照や水分の蒸発があったとしても、もし神が奇跡を起こしていたら、あの花は枯れなかつただろう。とすれば、「神が奇跡を起こさなかつたこと（即ち、神の不作為）が、あの花が枯れた原因だ」と言えることになる。不作為や否定的出来事の内では当該結果の生起を妨げえたものは数限りなくあるだろうから、不在因果を認めると、直観に反するほど数多くの原因を認めなければならないことになってしまう。これが⑥の批判である。

これらの批判には第3節で答えるが、その前に、次の第2節で、肯定的出来事を原因結果とする因果関係の特徴について考察することによって、因果関係とはそもそもいかなる関係であるのかを明らかにしよう。

2. 因果関係とは何か

(1) 出来事個体間の因果関係は出来事類型間の関連性を暗黙の前提とする

或る出来事、例えば、或る建物の火事が生じたとする。この特定の出来事（即ち、出来事個体¹⁰⁾）の原因を探求した結果、「その建物の中の或る場所で電線がショートしたこと」が火事の原因だとされたとする。この因果関係は、「あの電線のショート」と「あの建物の火事」という実際に生じた出来事（肯定的出来事）の間に成り立っている。では、原因である出来事個体c（電線のあのショート）と結果である出来事個体e（あの建物の火事）の間に成り立って

いる関係はいかなる関係なのか。それは、単に、「cの直後に、そして、すぐそばで、eが生じた」即ち「cとeが時間的空間的に近接している」という関係ではない。例えば、「病原菌の侵入」という原因によって「発熱」と「咳」という2つの症状がこの順序で連続して生じた場合、発熱と咳は時間的空間的に近接しているが、「咳の原因は発熱だ」ということにはならないであろう。これらは「病原菌の侵入」という共通の原因から生じた2つの結果であろう。では、因果関係と時間空間的近接関係（spatiotemporal contiguity）とはどう異なるのか。解熱剤によって発熱を防いでも病原菌がいる限りやはり咳は出るだろうから、「もしあの発熱がなかったら、この咳は出なかつただろう」とは言えないが、他方、火事の例の場合、「もし電線のあのショートがなかったら、この火事は生じなかつただろう」と言うことはできるだろう。つまり、因果関係の場合は「もしあの原因が生じなかつたら、この結果も生じなかつただろう」という反事実的依存関係（counterfactual dependence）が成り立っている。このことが単なる時間空間的近接関係と因果関係との違いだと考えられる⁹⁾。

しかし、ここに問題が生じる。それは、「もし電線のあのショートがなかったら、この火事は生じなかつただろう」という反事実的依存関係が成り立っていることを、何を根拠に知ることができるのか」という問題である。というのは、電線のあのショートという出来事個体cは既に生じてしまっており、この出来事個体cが生じていないという状態は世界の実際の歴史の中のどこにもないのであるから、「もしショートしていなかつたら」という反事実的な想定をしても、その場合に世界の中に実際に何が生じていたかを知ることが、もはや不可能である。言い直せば、「出来事個体cが生じなかつたら出来事個体eも生じていなかつただろう」というふうに出来事個体cと出来事個体eが連動するか否かは、出来事個体cと出来事個体eだけを見ている限り、もはや知ることはできない。両者が連動するなら、「もしあのショートがなかったならば、あの火事は起こらなかつただろう」という反事実的依存関係が成り立つのだが、連動するか否か知りえないのなら、この反事実的依存関係が成り立つか否かを知ることもしできないことになる。

しかし、とすれば、過去の出来事に関して因果関係を言うことは一切不可能にならないか。あの火事の原因を探していた我々は「もし電線のあのショートがなかったら、この火事は生じなかつただろう」と実際に言うが、これらの出来事個体同士の反事実的依存関係を我々はどこから知るのだろうか。

ここで、出来事個体（event-individual）と出来事類型（event-type）の区別を確認しておこう。「火事」が出来事類型であるのに対し、「或る特定のときに生じた或る特定の建物の火事」は出来事個体である。「人間の誕生」・「冬季オリンピック」・「戦争」が出来事類型であるのに対し、「あなたの誕生」・「バンクーバー冬季オリンピック」・「第二次世界大戦」は出来事個体である。このように、出来事個体は、特定の物個体を含み、特定の場所や時間と結びついており、特定の内容を持っている。一方、出来事類型は複数の出来事個体に当てはまる。

さて、上の「もし電線のあのショートがなかったら、この火事は生じなかつただろう」という反事実的依存関係はいかにして知られるのか。それは、何らかの出来事類型および類型間の関連性に訴えることなしには知りえないであろう。つまり、既に生じた出来事個体を何らかの出来事類型のもとで捉えることによってのみそれら出来事個体間の関係が知られるのではないだろうか。既に生じてしまった出来事個体そのものではなく、その出来事個体が属する出来事類型が他の類型との間に持っている一般的関連性、これが、生起済みの出来事個体に関する

る反事実的依存関係を知りうる根拠になっているのではないだろうか。つまり、「電線のショート」という出来事類型Aと「建物の火事」という出来事類型Bの間に「出来事類型Aに属する出来事個体が生じなかったら、出来事類型Bに属する出来事個体も生じない」という関連性が一般的に成り立っており、そのような一般的類型的関連性に訴えることによって初めて、「もし、電線のあのショート（出来事個体c）がなかったなら、建物のあの火事（出来事個体e）もなかったであろう」という出来事個体の関連に関する反事実的依存関係の成立を主張することが正当化される。要するに、出来事類型間の関連性の方が出来事個体間の反事実的依存関係よりも先行するのである。このように考えない限り、既に生じてしまった出来事個体に関して、その出来事個体が生じなかった場合に何が生じるか（或いは何が生じないか）を我々が知ることは不可能であろう⁹⁾。

要約しよう。既に生じた出来事個体c（特定の電線のショート）と出来事個体e（特定の火事）に関して、「もしcが生じなかったらeは生じなかっただろう」という反事実的依存関係を根拠に「cがeの原因だ」と主張される。しかし、過去は変更できないだろうから、cが生じなかった場合に実際に何が起こっていたかは知りえない。出来事個体間の反事実的依存関係は出来事類型間の一般的関連性を暗黙のうちに前提している。即ち、「出来事個体cは出来事類型A（電線のショート）に属し、出来事個体eは出来事類型B（或るタイプの火事）に属している。かつ、類型Aに属する出来事個体が生じない場合、類型Bに属する出来事個体も生じない」という一般的類型的関連性が暗黙のうちに前提されて、「cがeの原因だ」と主張されている。要するに、生起済みの2つの出来事個体だけを見ている限り、両者を「原因」と「結果」としてつなぐものは存在せず、出来事個体間の因果関係は出来事類型間の関連性を暗黙の前提としている¹⁰⁾ということである。

（2）結果は原因だけでなく背景条件にも反事実的に依存する

出来事類型間の因果的関連性には、原因と結果の間の関連性だけでなく、原因・結果と背景条件（background condition）の間の関連性も含まれている。背景条件が満たされていないとき、原因が存在していても期待された結果は生じない。例えば、「或る時に生じた特定の火事の原因が電線のショートであった」という前述の例の場合、出来事個体c（電線のあのショート）が出来事個体e（あの建物の火事）を引き起こすためには、酸素や可燃物が周囲に存在していたことが必要である。電線がショートしても、そばに可燃物がなかったり、可燃物があったとしてもそれが湿っていたり周囲の酸素が不足していたら、あの火事は生じなかっただろう。つまり、或る特定の火事は、電線のショートだけでなく、「すぐそばに可燃物が存在していたこと」、「その可燃物が乾燥していたこと」、「周囲に十分な量の酸素が存在していたこと」などの背景条件にも反事実的に依存している。これらは、原因と一緒に結果を産出する条件、即ち「産出条件（producing condition）」であるが、産出条件のもとで初めてあのショートはあの火事の原因になりえたのである。

背景条件には、産出条件の他に、結果の生起を妨害する条件、即ち「妨害条件（preventing condition）」もある。例えば、あのショートが起こったとき洪水が起こっていれば火事にならなかっただろうから、洪水はあの火事の生起を妨害する条件である。他にも、「天井から水が降って来ること」、「建物が水没すること」、「零下50度であること」なども妨害条件になりうるであろう。したがって、あのショートがあの火事を引き起こすためには、「そのとき洪水が起

こっていないこと」,「天井から水が降ってこないこと」,「建物が水没しないこと」,「零下50度でないこと」など,即ち,妨害条件が不在であることが必要である。以上のように,原因から結果が産出されるためには,「産出条件が現存し,かつ,妨害条件が不在であること」即ち「背景条件が満たされている」ことが必要である。このように,結果は原因のみならず背景条件にも反事実的に依存しているのである¹⁰⁾。

しかし,普段我々は背景条件のことを滅多に意識しない。それは,我々人間の周囲の身近な世界が概ね背景条件を満たしているからであり,また,既に生じた結果に関しては(定義上)背景条件は必ず満たされているからである。背景条件はその名の通り通常は「背景」に退いている。結果が生じた以上,背景条件も満たされていたはずだが,何が背景条件であるかをあらかじめ網羅的に知ることは不可能である。とりわけ,妨害条件はほとんど無数にあるから,何が妨害条件であるかをあらかじめ知ることは不可能である¹¹⁾。

(3) 原因と背景条件の区別は文脈依存的・人間依存的である

結果と背景条件の間の反事実的依存関係も出来事類型間の関連性に基づいている。しかし,個別の因果関係における原因と背景条件の境界線は文脈(context)に応じて変動する。文脈には,因果関係を問う際の人々の知識や関心や期待(即ち,何が「ノーマル」な出来事として期待されるかということ)などが含まれる。

例えば,そのような文脈としてハート&オノレ([Hart and Honoré 1985, pp.34-35])は次の例を挙げる。一般家屋の火事の場合,電線のショートなどが原因とされ,酸素の存在は原因ではなく単なる背景条件と見なされるであろう。しかし,酸素が意図的に排除されている実験室で火事が起こった場合,今度は酸素の存在は背景条件でなく原因と見なされるであろう。同じ「火事」という類型に属する出来事であるが,一般家屋と実験室の場合とではその出来事個体が生起する文脈が異なるから,原因と背景条件の境界線が異なるのである。(この文脈をメンズィーズ([Menzies 2004, p.143])は「生起の文脈context of occurrence」と呼ぶ。)また,インドで大飢饉が起こったとき,インド人の農夫は「干魃が大飢饉の原因だ」と見なすだろうが,国際食料機構は「インド政府による食料備蓄の不足が原因であり干魃は背景条件に過ぎない」と見なすかもしれない。農夫と国際食料機構は原因を探求する文脈が異なっているからである。(この文脈をメンズィーズ([Menzies 2004, pp.143-144])は「探求の文脈context of inquiry」と呼ぶ。)

また,我々人間にとってノーマルな状況が,金星人にとってはノーマルでない,という場合もありうる。大気中に酸素が存在しない金星から地球にやって来た金星人が地球の山火事を見た場合,彼らは「この星の大気中に存在する酸素がこの現象の原因だ」と言うであろう。つまり,金星人にとって「酸素の存在」は背景条件ではなく原因だと見なされるであろう¹²⁾。このように,背景条件と原因の区別は人間依存的である。

要するに,慣れ親しんだ背景や期待される出来事と対照的(contrastive)な出来事が際立ち,前景(foreground)へ浮かび上がって来て,「原因」として扱われるのである。通常の家屋の火事の場合,酸素の存在は当たり前のことであるから前景に浮かび上がってこないが,酸素のないはずの実験室で火事が起こった場合,「電線のショート」,「可燃物の存在」,「酸素の存在」などのうちで特に「酸素の存在」が際立ち前景へ浮かび上がって原因とされ,他の条件は背景にとどまったのである。また,インドの大飢饉の例においても,農夫と国際食料機構と

では、探求の目的が異なるから、前景へ浮かび上がる出来事も異なる。人間と金星人が山火事を見るケースの場合、我々人間なら、「たばこの投げ捨て」か何かの原因であると言い、「大気中の酸素の存在」など意識することすらないが、金星人にとっては「大気中で何かが燃焼する」ということ自体が極めてアブノーマルな出来事であり、それゆえ、彼らにとっては「大気中の酸素の存在」が前景に浮かび上がって来ているわけである。

このように、個々の因果関係は、言わば、背景条件という背景の前に前景として浮かび上がっているものであり、そして、何が浮かび上がって来るかは、因果関係を問う際の文脈・関心・知識・期待に応じて流動的である¹⁰⁾。メンズィーズ ([Menzies 2007, pp.192, 198]) が言うように「因果関係という概念は文脈可感的 (context-sensitive)」であり、「異なる文脈においては、具体例の異なる特徴が際立つ」のである¹⁰⁾。

それでは、次節では、因果関係全般に関する以上の考察を踏まえ、第1節で述べた不在因果への批判⑤⑥に答えることにしよう。

3. 不在因果批判に答える

(1) 「妨害条件の不在」が「原因」として際立つと「不在因果」となる

火事の例の「乾燥した可燃物や酸素の存在」は、原因と一緒にあって結果を産出する条件、即ち、産出条件である。他方、「天井から水が降って来ること」、「建物が水没すること」、「零下50度であること」などは、結果の生起を妨げる条件、即ち、妨害条件である。結果が生起する「ノーマル」な状況下では妨害条件は不在である。産出条件がすべて現存していても、そこに妨害条件が現れていたら、結果は生じない。「建物の水没」とか「零下50度」というのは奇抜な例であるが、「天井から水が降って来る」というのは現実にも起こる。それはスプリンクラーという防火装置である。乾燥した可燃物や酸素が存在しているところで電線がショートして発熱してもその熱を感知してスプリンクラーから水が降ってくれば火事という結果は生じない。

また、「何が背景条件であるかをあらかじめ網羅的に知ることは不可能だ」と前述したが、このことは妨害条件に一層よく当てはまる。何が結果の生起を妨げうるのか、そのすべてをあらかじめ知っておくことは不可能である。期待された結果が生じなかったとき、それが未知の妨害条件のせいだということはしばしば起こることである。

第1節の①「太郎があの花に水をやらなかったことが、その花が枯れた原因だ」という例において、あの花が枯れたことの背景条件はたくさんある。産出条件としては、「過度の日照」や「花からの水分の蒸発」などがあるし、妨害条件としては、「太郎の水やり」、「エリザベス女王の水やり」、「任意の人物の水やり」などがある。彼らの不作為はいずれもあの花が枯れたことの背景条件である。そして、これら多数の背景条件の中から太郎の不作為が前景に浮かび上がって来て「原因」とされることがある。それが「不在因果」である。つまり、不在である妨害条件が「背景条件」としてでなく「原因」として扱われるとき、それは「不在原因」となる。

背景条件のうち、どの部分が前景に出てくるかは、第2節で述べたように、因果関係を問う際の文脈・関心・知識・期待による。太郎の不作為が前景に出て来た一つの理由は、太郎の水やりの期待可能性が大きかったことにある。他方、エリザベス女王があの花に水をやることの

期待可能性は小さいから、「エリザベス女王の水やり」の不在はあの花が枯れたことの背景条件ではあるが、前景に出て来て「原因」になることはない。しかし、「誰も水やりをしなかったことがあの花が枯れた原因だ」という言い方が自然であるのは、エリザベス女王のような（太郎以外の）特定の人物の水やりの期待可能性が小さいのに対し、誰かが水やりをすることの期待可能性は（太郎が水やりをする期待可能性ほどではないが、）大きいからである。

太郎の水やりも、エリザベス女王の水やりも、任意の人物の水やりも、あの花が枯れたという結果の生起を妨げる条件、即ち妨害条件である。したがって、これらの妨害条件の不在、即ち、彼らの不作為はいずれもあの花が枯れたことの（少なくとも）背景条件である。しかし、そのうち、太郎の不作為が最も際立つから「原因」となるのである¹⁰。つまり、一方で、「太郎の水やりは期待できる。→太郎の不作為は際立つ。→太郎が水をやらなかったことはあの花が枯れた『原因』である」という関係があり、他方で、「エリザベス女王その他の人物の水やりは期待できない。→彼らの不作為は際立たない。→彼らが水をやらなかったことは『原因』ではない」という関係がある。ただし、「水をやる人が誰かいることは期待できる。→誰もやらないことは際立つ。→誰も水をやらなかったことは『原因』である」という関係はあるから「誰も水をやらなかったこと」もあの花が枯れた「原因」の一つである。

このように、背景条件のうちで際立つ出来事が前景に浮かび上がって来て「原因」になるという構造は、産出条件だけでなく、妨害条件の不在に関しても当てはまる。こうして「不在因果」と呼ばれる因果関係が現れてくるわけである。

ただし、犬のポチや猫のタマが水やりすることは期待できないだろうから、彼らの不作為は背景条件にすらならず、したがって、原因にもならない。神の奇跡に関してポチやタマの水やり程度の期待可能性しかないと考える人にとっては、神の奇跡は背景条件に入らない。しかし、奇跡が生じる期待可能性を大きく見積もる人にとっては、神の不作為は背景条件に入り、場合によっては前景に浮かび上がって来て原因になることもある。このように、「原因」「背景条件」「それ以外の出来事」の間の境界はグラジュアルかつ流動的なのである。

（2）不在因果への批判：因果関係と因果的説明の区別

以上のような「不在因果」の捉え方に対する根本的な批判がある。次の⑦である。

因果関係と因果的説明は区別すべきである。……………⑦
因果関係（causation）と因果的説明（causal explanation）の区別はデイヴィッドソン（[Davidson 1967, pp.155-162], [Davidson 1970, p.215]）が主張した。デイヴィッドソンによれば、因果関係が出来事（event）間の関係であるのに対し、因果的説明は出来事の記述（description）間の関係に過ぎない。そして、この区別を踏まえ、ビービー（[Beebee 2004, pp.293, 301-306]）は、次の⑧のように言う。

不在因果は因果的説明の一種にすぎず、因果関係そのものではない。……………⑧
即ち、「不在因果は真正の因果関係ではない」と批判するのである。この批判に対し、以下のように答えることができる。

因果関係と因果的説明を相対的に区別することはできるが、あらゆる説明から独立の「因果関係それ自体」なるものはない。なぜなら、原因項・結果項となる出来事個体のタイプとしての同一性（「何」であるかということ）が出来事類型を前提とし、かつ、出来事類型は類型間の関連性を前提とするからである。したがって、因果関係は何らかの因果的説明を前提とする。

つまり、両者は相互依存的である。以下、説明しよう。

確かに、一つの出来事個体に対して複数の記述を与えることはできる。例えば、或る建物が崩壊し、「その原因は建物の中の或るボルトが壊れたことにある」と判明したとする。しかし、その後、「そのボルトがゆっくり壊れていたら建物は崩壊しなかった」ということも判明したとする。このとき、建物崩壊の原因である一つの出来事個体に対して、「そのボルトの破損」という大雑把な記述と、「そのボルトの突然の破損」という詳しい記述との、2つの記述を与えることができる。そして、因果的説明としては、「突然の破損」という記述の方が、「破損」という大雑把な記述よりも適切だということになる。このように、「出来事間の関係としての因果関係」と、「出来事の記述間の関係としての因果的説明」が、相対的に区別されることは認めることができる。しかし、だからといって、「あらゆる因果的説明から独立の因果関係それ自体」なるものが存在することにはならない。それはちょうど、一つの物体が複数の記述を持ちうるからといって、「あらゆる記述から独立の裸の個体」のようなものが存在することにはならないのと同様である。

第2節で述べたように、出来事個体間の因果関係は、出来事類型間の一般的関連性を暗黙のうち前提しているが、実は、生じた出来事が何であるか（即ち、どんな類型に属するか）を我々が理解している際、その理解のうちには他の類型との関連性の理解も含まれている。だからこそ、我々は単独の事例の中に因果関係を（推論によらずに）直接に知覚しうるのである。例えば、今、投げられた石が窓ガラスに当たり次の瞬間にそのガラスが割れたとしよう。その際、我々は「石」「ガラス」という物の類型や「衝突」「割れる」という出来事の類型の間の関連性に基づいて、（単に「石が当たって、そして、ガラスが割れた」という出来事の前後関係だけでなく、）「石が当たったことが原因でガラスが割れた」という因果関係をそこに知覚する。このとき我々は推論を行なっていないであろう。実際、もしシュークリームが窓ガラスに当たり次の瞬間にそのガラスが割れた場合、瞬時に我々はその意外さに驚くだろう。「シュークリーム」と「ガラス」と「衝突」と「割れる」の間には「石」の場合のような類型的関連性がないからである。その場合、我々は、「シュークリームの中に実は金属のかたまりが入っていたのではないか」とか、「あの透明な板はガラスでなく氷だったのではないか」というように、納得できる類型的関連性を探し始めるであろう。

つまり、眼の前の物体が「石」や「ガラス」であるというこの理解、そして、眼の前で起こったことが「衝突」や「割れること」であるというこの理解の中に、それらの類型間の関連性への理解が既に含まれている。「まず出来事、それから因果関係」という順序ではなく、物や出来事を記述するために日常用いられる述語には既に因果的内容が含まれている¹⁹⁾。言い直せば、出来事類型の成立と出来事類型間の関連性の成立とは相即的である。各々の出来事類型は孤立して成立するのではなく、他の出来事類型との関連性を含みつつ成立する。或る出来事が「何」であるかということの内に既に他の出来事類型との関連性が含まれている。そして、因果的関連はそのような出来事類型間の関連性の一つである²⁰⁾。

この関連性の理解を我々は概念体系（または言語）の習得とともに獲得する。それゆえ、経験の反復（ヒュームの言う原因と結果の間の「恒常的連接（constant conjunction）」）は個人の経験として必須ではない。出来事類型間の関連性の理解は、言わば人類の経験として概念体系（言語）のうちに蓄積されていくのである。したがって、酸素がない状態がノーマルである金星人には「火事」という概念がないかもしれない。慣れ親しんだ背景が異なる場合、「原

因」と「背景条件」の境界の変動にとどまらず、出来事類型自体が別のものになる可能性がある。

要するに、因果関係と因果的説明とは相互依存的³⁹⁾であり、両者の峻別を前提とする上の⑧の批判は成り立たない。

(3) 不在因果批判⑤⑥（因果的力の欠如・原因の増加）への回答

第1節で挙げた不在因果批判⑤⑥に答えよう。まず⑥をもう一度書いておこう。

不在因果を認めると、直観に反するくらい、原因が多くなる。……………⑥

この批判に対して、次のように答えることができる。第2節および第3節(1)で述べたように、「原因」「背景条件」「それ以外の出来事」の区別がある以上、不在因果を認めても、原因はそうやたらに多くはならない。しかし、より根本的に言えば、出来事の生起に影響を与えたものは通常考えられるよりもはるかに多いのであり、原因が多少多くても構わない、いや、むしろ、個別の因果関係において、原因と結果のまわりに多くの背景条件がグラジュアルに広がっていることを見逃してはならない。出来事類型間の関連性を一切無視して考えれば、或る時点で生じた出来事個体はそれ以前の世界のあり方全体から影響を受けていると言える。その中からどのような関連性が類型化され何が「原因」として浮かび上がって来るかは文脈・関心・知識・期待に応じて決まる。出来事類型間の関連としては「原因」と「結果」だけが目立つが、現実が生じた出来事個体間の関係としての因果関係においては「原因」と「結果」のまわりに多くの背景条件が広がっている。したがって、膨大な背景条件の広がりがあることはむしろ自然なことである。(ただし、それらの膨大な背景条件のうちから、特定の出来事が「原因」として浮かび上がってくる。つまり、「背景条件」と「原因」の区別は維持されており、原因が多くなりすぎるということはない。)

もう一つの不在因果批判は次の⑤であった。

非存在は因果的な力を持たないから原因になりえない。……………⑤

この批判に対して、今や次のように答えることができる。肯定的出来事を原因結果とする因果関係において既に「妨害条件の不在」という非存在が含まれている。したがって、非存在を理由にした批判はできない。そもそも因果関係とは世界と人間とが共同して作り出した秩序(即ち、出来事類型間の関連)である。だからこそ、出来事類型や類型間の関連性は文脈・関心・知識・期待に依存して変動し、因果関係は文脈依存性・人間依存性という特徴を示すのである。「何かが無いことが、他の何かをもたらす」という類型的関連性を我々が世界の中に見出したからといって、それは少しも不合理なことではない。不在因果もまた、世界で生じているさまざまな変化の中に人間が見出す秩序(出来事類型間の関連)の一つのタイプなのである³⁹⁾。

注

- 1) [Beebee 2004]や[Dowe 2001]から不在因果の他の事例を挙げる。「父の不注意が、その子の事故の原因だ。」「ジョーンズが防火扉を閉めなかったことが、その建物を破壊した大火事の原因だった。」「彼の犬は昆虫に刺され眼の病気になった。しかし、彼はその病気を無視した。その結果、その犬は視力を失った。」「雨不足がその山火事の原因だった。」「霜が降りなかったのでゼラニウムはロンドンの冬を越した。」などである。
- 2) さらに、原因と結果の両方が否定的出来事であるような不在因果もある。例えば、「十分な雨が降らなかったことが、その木に果実が実らなかった原因だ」という因果関係において「十分な雨降り」も「その木に果実が実ること」もどちらも実際には生じていない。
- 3) シェイファー ([Schaffer 2004, p.203]) は不在因果を真正の因果関係として認めるべき4つの理由を挙げる。即ち、不在因果は、(1) 因果関係を反事実条件・統計・行爲者・証拠・説明・道徳的責任のいずれによって捉える場合にも、そこに含まれている。(2) 実は、因果関係の典型例にも含まれており、法や日常言語に現れている。(3) 指示・合理的意志決定・知覚などの説明に必要である。(4) 心理学・生物学・化学・物理学などに必要である。他方で、シェイファー ([Schaffer 2005, pp.300-302]) は、不在因果の問題点として、後述の⑤⑥や、不在因果において「エネルギー・運動量の流れ」や「時空的連続性」が欠如していることを挙げている。
- 4) アームストロング ([Armstrong 2004, p.448]) は「無 (nothing) からは何も生まれない」と言う。
- 5) ⑥の批判についてはビービー ([Beebee 2004, pp.295-297]) を参照せよ。なお、不在因果を真正の因果として認めるマグラウ ([McGrath 2005, pp.126-127]) やルイス ([Lewis 2004, pp.100-101]) やメンズィーズ ([Menzies 2004, pp.142-145]) たちもこの問題を指摘している。
- 6) [Shaffer 2005, p.300]。
- 7) すぐ後に述べるように、出来事個体と出来事類型は区別される。
- 8) ただし、反事実的依存関係と因果関係とはぴったり重なるわけではない。キム ([Kim 1973]) によると、①論理的依存 (「もし昨日が月曜日でなかったら、今日は火曜日ではないだろう」)、②或る出来事が別の出来事の部分である場合 (「もし私が『r』を2回書かなかったなら、私は『Larry』と書いていなかったら」)、③別の行為をすることによって或る行為をする場合 (「もし私がノブを回さなかったら、私は窓を開けていなかったら」)、④単なるケンブリッジ変化 (「もし私の妹がそのとき出産していなかったら、私はそのとき伯父になっていなかったら」) などのケースにおいて反事実的依存関係は存在するが、因果関係は存在しない。
- 9) この反事実的依存関係は「類型」間の関係に基づくから、多重決定 (overdetermination) や先回り (preemption, backup) のような個別因果における例外事例は「例外」として別扱いをすべきである。「多重決定」というのは、例えば、「2人の人間AとBが互いに独立に被害者Cのウィスキーに致死量の毒を入れ、それを飲んだ被害者Cが死んだ」というケースで、「もしAが毒を入れていなかったら、Cは死ななかつたら」 という反事実的依存関係がない (なぜなら、その場合Bの入れた毒でCはやはり死ぬからである) にも関わらず、「Aが毒を入れたことがCの死の原因である」と言えるのはなぜか、という問題である。また、「先回り」というのは、例えば、「死刑囚Dの死刑執行の直前に、乱入したEによってDが射殺された」というケースで、「もしEが乱入しなかったら、Dは死ななかつたら」 という反事実的依存関係がない (なぜなら、その場合死刑が執行され、Dはやはり死ぬからである) にも関わらず、「Eが乱入したことがDの死の原因である」と言えるのはなぜか、という問題である。しかし、これらのケースは (実際に例外的にしか起こらないのみならず、原理的に) 例外的にしか起こりえない。というの、もし例外でなくなったら、我々の持つ出来事類型間の関連性自体が別のものになるであろうからだ。例えば、射的をするときに「的を狙えば (弾がどの方

向へ飛んでも)妖精が手を貸してくれて必ず的が倒れる」ということがノーマルな出来事であったら、「弾的に当たったことが原因で的が倒れた」という現在我々が持っている類型間関連)ではなく「的にねらって発射したことが原因で的が倒れた」という異なる類型化がなされるはずである。要するに、現在我々が持っている類型間関連は多重決定や先回りが例外であることに基づいているのである。

- 10) このような出来事類型間の関連性によって、生起済みの出来事個体同士がつながられ、出来事個体のネットワークが作られる。このネットワークを頼りに人々は過去の出来事個体への指示を行なう。また、逆に、人々による指示の営みを通して出来事個体のネットワークは作り上げられ維持されていく。ただし、出来事類型間の関連は因果関係だけではない。複数の出来事が同じ時間に同じ空間に重複して存在する場合もある。例えば、金属球が回転しながら発熱する場合、ここには同じ空間に同時に「金属球の回転」と「金属球の発熱」という異なる出来事個体が重複して存在している。或いは、一つの出来事の中に別の出来事が部分として含まれる場合もある。例えば、北京オリンピックという数日間の時間的幅を持つ出来事の中に開会式という出来事が含まれるようなケースである。他方、一つの出来事に対し、複数の記述が与えられている場合もある。例えば、北京オリンピックという出来事個体に「女子ソフトボール日本チームが初めて金メダルを獲得したオリンピック」という別の記述を与えることもできる。ただし、複数記述の場合と、前述の複数の出来事が重複している場合との区別はしばしば曖昧である。出来事存在性格に関しては[伊佐敷 2010]の第四章「出来事の同一性の基準」および第五章「出来事とはいかなる存在者か」を参照されたい。
- 11) ミル ([Mill 1874, bk. 3, ch., sec. 3, pp.237-241]) は、「肯定条件 (positive condition)」即ち「産出原因 (producing cause) の現存」、「否定条件 (negative condition)」即ち「妨害原因 (preventing cause, counteracting cause) の不在」などの用語を用いている。本論文の「産出条件」や「妨害条件」という語はミルのこれらの用語にならった。ただし、「背景条件」という語はパトナム ([Putnam 1983, p.214]) による。尤も、ミルは、「原因と条件の区別は人間による恣意的区別に過ぎず、この区別に科学的根拠はない」と言い、「肯定条件と否定条件のすべての合計」が「真の原因」即ち「哲学的意味での原因」であると言うのに対し、パトナム ([Putnam 1983, pp.211-214]) は「原因と条件の区別は説明にとって本質的な区別である」と言う。この点に関して筆者はパトナムに賛成である。
- 12) ノーマルな状況の持つ特徴の内どの部分が結果発生のために不可欠なのかは不明だということである。「ノーマルな状況下においては、背景条件は満たされている」と想定されている。そして、結果が実際に生じた場合この想定は正しかったことになる。他方、期待された結果が生じなかった場合はいかなる背景条件が満たされていなかったのかの探索が始まる。例えば、或る自然法則を実験によって確かめたい場合にねらった結果が生じなかったとしよう。その場合、「この自然法則は反証された」と考えられるのではなく、「何かの妨害条件が働いていたのではないか」と考えられるのが通常である。
- 13) [Putnam 1983, p.214], cf. [van Fraassen 1980, ch.5].
- 14) 原因と背景条件の境界線を左右する文脈としては、本文で挙げた「何が期待されるか。(酸素がないはずの実験室での火事の例)」や「何の目的で原因を探求しているか。(インドの大飢饉の例)」の他に、「何が新たに知られたのか。(溺死という結果に関して、水の存在は既に知られていたが、被害者が泳げないことが新たに知られた場合、後者が原因とされる。)」や「何が最後に変化したか。(火事という結果に関して、酸素や可燃物の存在は元からあり、最後に電線のショートという出来事が起こった場合、後者が原因とされる。)」や「何が操作可能か。(胃潰瘍という結果に関して、先天的体質と食事のうち、操作可能な後者が原因とされる。)」などもある。これらの例はミル ([Mill 1874]) やハート&オノレ ([Hart and Honoré 1985]) による。

- 15) ちなみに、ルイス（[Lewis 1973a]）は因果関係を反事実条件法によって分析し、反事実条件法をさらに（[Lewis 1973b]において）可能世界間の「類似性（similarity）」という概念によって分析するが、ペアソン（[Persson 2002, p.139]）も指摘するように、ルイス（[Lewis 1973b, p.92]）はこの「類似性」が文脈依存的・関心依存的だということを認めている。
- 16) cf. [McGrath 2005, pp.138-144]。
- 17) [Putnam 1999, p.144]。
- 18) ただし、出来事類型間の関連性は因果的関連だけではない。注10を参照せよ
- 19) [Putnam 1999, p.145]。
- 20) 因果関係に関する筆者の見解については[伊佐敷 2010]の第六章「未来と因果的決定論」も参照されたい。

参考文献

- Armstrong, D. M. (2004) "Going through the Open Door Again," in [Collins et al. 2004, pp.445-458].
- Beebe, Helen (2004) "Causing and Nothingness," in [Collins et al. 2004, pp.291-308].
- Collins, J., N. Hall, and L. A. Paul, (eds.) (2004) *Causation and Counterfactuals*, The M. I. T. Press.
- Davidson, Donald (1967) "Causal Relations," *The Journal of Philosophy*, vol.64, pp.691-703; reprinted in [Davidson 1980, pp.149-162].
- Davidson, Donald (1970) "Mental Events," in L. Foster and J. W. Swanson (eds.), *Experience and Theory*, University of Massachusetts Press, pp.79-101; reprinted in [Davidson 1980, pp.207-227].
- Davidson, Donald (1980) *Essays on Actions and Events*, Clarendon Press.
- Dowe, Phil (2000) *Physical Causation*, Cambridge University Press, especially ch. 6, "Prevention and Omission."
- Dowe, Phil (2001) "A Counterfactual Theory of Prevention and 'Causation' by Omission," *Australasian Journal of Philosophy*, vol.79, pp.216-226.
- Hart, H. L. A., and Tony Honoré (1985) *Causation in the Law*, 2nd ed., Clarendon Press, especially Part I, "The Analysis of Causal Concepts."
- Hitchcock, C. (ed.) (2004) *Contemporary Debates in Philosophy of Science*, Blackwell.
- 伊佐敷隆弘 (2010) 『時間様相の形而上学：現在・過去・未来とは何か』勁草書房。
- Kim, Jaegwon (1973) "Causes and Counterfactuals" *The Journal of Philosophy*, vol.70 (17), pp.570-572; reprinted in [Sosa & Tooley 1993, pp.205-207].
- Lewis, David (1973a) "Causation," *The Journal of Philosophy*, vol.70, no.17, pp.556-567; reprinted in [Lewis 1987, pp.159-172].
- Lewis, David (1973b) *Counterfactuals*, Basil Blackwell.
- Lewis, David (1987) *Philosophical Papers: Volume II*, Oxford University Press.
- Lewis, David (2004) "Causation as Influence," in [Collins et al. 2004, pp.75-106].
- McGrath, Sarah (2005) "Causation by Omission: A Dilemma," *Philosophical Studies*, vol.123, pp.125-148.
- Mellor, D. H. (1995) *The Facts of Causation*, Routledge Press, especially ch.11, § 2, "Negative causes and effects."
- Mellor, D. H. (2004) "For Facts as Causes and Effects," in [Collins et al. 2004, pp.309-323].
- Menzies, Peter (2004) "Difference-making in Context," in [Collins et al. 2004, pp.139-180].
- Menzies, Peter (2007) "Causation in Context," in [Price and Corry 2007, pp.191-223].
- Mill, J. S. (1874) *A System of Logic: Ratiocinative and Inductive*, 8th ed., Harper & Brothers, especially Book III, ch.V, § 3, "The cause of a phenomenon is the assemblage of its conditions."
- Persson, Johannes (2002) "Cause, Effect, and Fake Causation," *Synthese*, vol.131, pp.129-143.
- Price, Huw and Richard Corry (eds.) (2007) *Causation, Physics, and the Constitution of Reality: Russell's Republic Revisited*, Clarendon Press.
- Putnam, Hilary (1983) "Why there isn't a ready-made world," in *Realism and Reason: Philosophical Papers, vol.3*, Cambridge University Press, pp.205-228.

- Putnam, Hilary (1999) "First Afterword: Causation and Explanation," in *The Threefold Cord: Mind, Body, and World*, Columbia University Press, pp.137-150.
- Schaffer, Jonathan (2004) "Causes Need Not be Physically Connected to their Effects: the Case for Negative Causation," in [Hitchcock 2004, pp.197-216].
- Schaffer, Jonathan (2005) "Contrastive Causation," *Philosophical Review*, vol.114, pp.327-358.
- Sosa, Ernest & Michael Tooley (eds.) (1993) *Causation*, Oxford University Press.
- van Fraassen, Bas C. (1980) *The Scientific Image*, Clarendon Press, especially ch.5, "The Pragmatics of Explanation."

※本論文は2008年度科学基礎論学会（2008年6月22日，東京電機大学）における口頭発表「不在因果について」の発表原稿に加筆修正したものである。様々なご指摘をくださった参加者の皆様に感謝申し上げたい。

(2010年5月7日受理)